

森林と文明

I. 序 論

稲 田 充 男

はじめに

ここ数年来、「環境」「自然」「地球」という言葉をよく聞くようになった。さらに、「破壊」「汚染」あるいは「保護」「保全」などという言葉も目立ってきた。今では、地球環境問題を論じることが一種のブームのようでさえある。なぜ、これほどまでに環境問題が、関心を集めるようになったのか。

本来地球に生まれたものにとって、地球やその環境を日頃意識することはない。地球の営みの中に組み込まれている存在が、取り立てて地球やその環境を意識する必要がないのは当然のことである。そういう存在でさえ、地球温暖化、オゾン層の破壊、熱帯雨林の減少、砂漠化、酸性雨、海洋汚染など多くの問題を目の前にし、自分のまわりの環境を意識せざるを得なくなってきた。

地球規模の環境変化について、ローマクラブが警告したのはもう20年以上前のことである。なぜ急に意識し出したのか。リモートセンシング技術の進歩とそれによる地球観測データの蓄積、国際政治情勢の変化、頻発する異常気象など、さまざまな原因は考えられる。だが、その本質は、今まで我々が享受してきた文明の限界を感じてきたからではないだろうか。

人類は環境を改変することにより、自らの繁栄を求めた。その中で、「これまで私たちが文明という名のもとにあこがれてきたのは、自然を支配し、破壊し、人間を搾取する巨大な階級支配の構造に立脚した文明だった。」(安田, 1996)のではないだろうか。地球環境の危機に直面した今、その文明に疑問を感じたのではないだろ

うか。その意味において、地球環境問題を考えることは、単に地球と人類の共存方法を模索するにとどまらず、文明の本質を問うことである。

本論の最終目標は、支配的破壊的な文明とは起源を異にする文明、すなわち森林から生まれた共生と親和を目指す文明をとりあげ、自然と人間の共生と循環のあり方について考察することである。ここでは、この問題に対する研究序論として、森林と文明との関係について概観する。

自然環境の違いと文明の違い

自然環境の違いがそこに住む人間の思考方法を規定し、結果として文明の違いが生じることとはこれまで多くの研究者によって論じられてきた。たとえば和辻は、風土の違いにより西洋の「理性の文明」と東洋の「感性の文明」が誕生したと考えた。(ここに風土と呼ぶのはある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称である。それは古くは水土とも言われている。人間の環境としての自然を地水火風として把握した古代の自然観がこれらの概念の背後にひそんでいるのであろう。)(和辻, 1935) すなわち、「ヨーロッパの穏和な牧場の自然の中では、人間は理性の力をもって自然をコントロールしたり、あるいは自然を分析的に研究することができる。それゆえに、ここでは自然科学が発展した。これに対して東洋のモンスーンでは、自然の力が圧倒的に強いので、自然を分析的に研究しようとするような気持ちが起こる前に、人間が自然に圧倒されている。だからそういうところでは、人間の理性が輝かないで、自然科

学が发展しなかった。」(安田, 1996) と考えた。ただし、和辻は風土は人間主体そのものの存在を前提としているのに対し、環境は抽象化という動きによって客体化されているということで、風土と環境をはっきり区別している(ベルク, 1996)。また、鈴木は人間の思考方法を森林的思考と砂漠的思考の二つに分け、世界が「永遠」に続くと考えるか、「有限」であると考えるか、人間の論理にとってはどちらか一つに分かれることに根ざしているから、その二つにしか分けられないことを述べた(鈴木, 1978)。

そのなかでも「森の有無」が、人類文明の違いを生み、その違いがそれぞれの環境問題に大きく影響しているとする岸根の考え(岸根, 1996)を本論の基本的立場とし、その詳細を次に示す。

『乾燥気候の下では年間降雨量は80ミリから600ミリ以下であるから、森林は皆無か疎林になりやすく、そこがやがて草原化することになる。その証拠に、ユーラシア大陸の西側に位置する西洋は「草原の地」となり、そこでは草原に依存する「草原の文明」が生まれた。これに対し、日本列島はユーラシア大陸の東側に位置しており、そこはモンスーン地帯で雨が多いから森の豊かな「森の地」となり、森林に依存する「森の文明」が生まれた。このようにして、「ユーラシア大陸の東西の自然環境の違い、なかでも森の有無が、東洋文明を森の文明へ、西洋文明を草原の文明へと発展させた」ということである。このことは、「人類文明は、森の有無によってその姿を変える」ということである。』

『東洋は森の豊かな「森の地」であるが、森があればそこには必ず「森林生態系」(輪廻転生の世界)があるから、東洋では神と自然(それらを総称して天と呼ぶ)と人間は根源において同体であるとする「天神合一の思想」が発想され、それを背景に多神信仰の「物神一元論型の宗教」(仏教や神道など)が生まれ、それがやがて「物神一元論型の東洋文明」、したがって「自然親和型自然共生型の東洋文明」へと発展していった。このようにして、「森こそが、東洋の宗教の源泉であり、東洋文明の揺籃である」ことが明らかにされる。つまり、東洋の豊かな森が、輪廻転

生の思想を通じて、自然との共生を目指す「物神一元論型宗教」(物心一元論型宗教)を生み、それがやがて「自然親和型自然共生型の東洋文明」へと発展していったということである。』

『西洋は森林の少ない「草原の地」ないしは「砂漠の地」で、そこにあるのは、「星」(それが、神性化して超越神になった)対「人間」対「自然」の上下の支配関係(支配の世界)であったから、そこに神が人間も自然も支配するとの「万有在神論」が発想され、それを背景に超越神信仰の「物神二元論型の宗教」(ユダヤ教やキリスト教など)が生まれ、それがやがて「物神二元論型の西洋文明」、したがって「自然対決型自然支配型の西洋文明」へと発展していった。このようにして、「草原こそが、西洋の宗教の源泉であり、西洋文明の揺籃である」ことが明らかにされる。つまり、西洋の貧しい草原が、自然支配の思想を通じて、自然との対決を目指す「物神二元論型宗教」(物心二元論型宗教)を生み、それがやがて「自然対決型自然支配型の西洋文明」へと発展していったということである。』

庭園の様式の違い

前節で見た、東西の違いを我々の身近のものとして、庭園の様式に見ることができる。庭園は定着農耕時代の住居の発生と期を同じにしており、住居に接続した生活のための場として発展してきた。庭園とは、仕事をするための場(庭)と、作物を栽培するための囲いのある土地(園)が結合した言葉で、1873年小沢圭次郎著「明治庭園記」からといわれている。その庭園の様式を決定するものとしては、植物、気象、岩石、地形、土質、日照などの自然的な要因と、国民性、歴史、技術、政治、経済、建築、芸術などの社会的な要因がある。このような種々の要因を包括しながら、庭園の様式は変化してきた。まさに庭園の様式は、自然環境とそれより生まれた文明の顕在化そのものである。庭園の具体的な形態(存在者)は自然の形態の様式化であり、表現されているのは「自然」そのものではなく、

人間の創造性に反映したものとしての自然の「おもむき」である（ベルク、1996）。

一般的には、庭園の型は洋風庭園と和風庭園とに大別される。概念的には、洋風といえば芝生を主体とした庭園、一方、和風といえば風景を写したものの、または石組があり滝がある自然風なものと考えられている。しかし、この分類は多くの例外があり、混乱を招く。よって、学問的に庭園の形態を分類する際には、建築式庭園と風景式庭園とに大別する。

建築式庭園は地割、園路、刈り込み樹木などに、幾何学的な線を使って平面や立体を構成しているのが特徴であり、周りの環境と一線を画し閉鎖的である。草花の取り扱いも、集団的な密植による構成となっている。建築式の人工的な作り方に対して、風景式庭園は自然形態に近く作り上げているのが特徴であり、日本独特の手法である借景に代表されるように開放的である。（借景：庭園外の山や樹木の風景を、庭園の景の一部として取り入れること。）

石についてみると、建築式は神話や伝説に出てくる神や花鉢など、石の素材よりむしろ形のほうを重視する。これに対して風景式は自然石をそのまま使い、彫刻されているものはごく一部で数少なく、石の色や質などに重点を置いている。水にしても、建築式では階段状に落とすカスケードや、逆に吹き上げる噴水のように、すべて動的に使用するが、風景式では滝や流れなどできるだけ自然に近づけようとしている。また、建築式庭園では園路が直線と幾何学的な曲線で作られているのに対して、風景式庭園では園路を隠すような手法が取り入れられている。

建築式庭園はヨーロッパ中心に発展し、フランスの平面幾何学式庭園、イタリアの立体的庭園はその代表である。また、建物と庭園との調和が取れ、地割は前庭（公共性）、主庭（居住性）、裏庭（実用性）、野菜・果樹庭などに判然と区分され、さらに全体としての景観が重視されているアメリカの庭園もその例である。住居に接続した土地で、周囲に囲いがあり、菜、花、葉草などを植える「園」の要素が強い。これらの庭園が幾何学的な形態をとるのは、「近代合理

主義が存在者と存在の分離の道をたどって、自然の内在的法則は数学の言葉で表現できるという発見をしたからである。したがって幾何学的庭園は、自然的な存在者の形態を模倣する必要なしに、自然の存在を放言することができた。」（ベルク、1996）からである。

一方、風景式庭園は日本の名庭にみられるように、森の豊かな地で発展した。日本庭園が幾何学からほど遠いのは、「東アジアの伝統においては、存在を存在者から分離することが無意味だからである。」（ベルク、1996）また、江戸時代の農家では家の中にある土間を「ニワ」と呼んでいたことがあり、仕事をする場としての「庭」の要素が強い。また、イギリスは当初、フランス庭園の様式を学び取ろうとしたが、あまりにも人工的なフランスの庭園の様式は定着することなく、やがて自然を利用した風景式の独自の様式が確立されるに至った。ドイツの庭園はイギリスの風景式庭園の流れをくみ、よく似ているが、同時にフランスの建築式庭園の要素も入っている。（ただし、日本の庭園様式は風景式であるが、同じ風景式でもイギリスやドイツなど他の国とはまったく異なった様式で、世界の庭園の中でも独立している。）

環境問題の起源

松井は現在の地球環境問題が生じた原因を次のように論じている（松井、1990）。

『我々はこれまで地球の自然の営みのなかで、そこからそれほど逸脱することもなく生きてきた。人類が誕生して400万年間のほとんどは地球の生態系の中に組みこまれ、人類以外の生態系とバランスする形で地球に生かされてきた。』

人類史のうえで転機が訪れたのは約一万年前である。この時人類は農耕をはじめた。農耕とは、地球の生態系とは異なる人工の生態系をつくりだすことである。そのために食糧が確保され、この時から人類のより安定した生存が保証されることになる。人工の生態系を拡大するためには、地球（自然）を知り、それを征服することが必要である。そのために文明が生まれ

た。文明とは、その発生時から地球と敵対する宿命にあったといえよう。文明の盛衰の歴史はそのまま環境問題に集約できるのではなかろうか。

一万年前、人類は地球を食いつぶすことで自らの繁栄を築くという道を選択した。その延長線上に現在がある。これまでの文明はその規模がローカルであったために、その本質が問われなかっただけのことである。ところが現代文明はその維持と発展のために、巨大なエネルギーと物質を消費する。一方で人類の生存はより確かに保証され、人口が急激に増加し、地球の生態系の中で突出した存在となった。

その結果、現在の環境問題が生じたといえる。』

生物進化の歴史から見て、生物による環境変化は、生物が存在するかぎり必然的に起こる地球進化の過程であり、それは不可避のものである。とくに人類と環境との関係について湯浅が指摘(湯浅, 1993)しているように、種としての人間は自然の一部でありながら反自然的な要素を持つ存在であり、人間の営みは狩猟採集民の時代から基本的には自然破壊的であり、なかでも火は動物の狩猟や植物の採取物の質をよくするための使われ、その結果、自然を大きく改変してきた。

「文明」の出発点としての農業が、森を破壊する力であり、耕地の確保は、いかに小規模とはいえ、森林を切り開くことによってなされた。手取り早いのは、森を焼き払うことであり、焼畑農業の始まりである。続いて人類が鉄器を手に入れ、伐採が加速された。その背景には「都市＝文明、森＝野蛮」という公式が、ヨーロッパ文明の底流にあったからであろう。このことは、ヨーロッパ諸語の語源を訪ねても、「文明」と「森」は二つの対立する原理であったことがわかる(川崎, 1987)。

以上、現在の環境問題の起源を、上記の岸根理論(岸根, 1996)でとりまとめると次のようになる。

『森林があってはじめて成立する東洋の水田稲作農業は、地表(森林)を剥ぎ取って水田に

するという意味では環境破壊産業であるが、水田稲作農業は、本来、自然(森林)との共生がなくては成立しない産業であるから、そのような産業の下では大規模な森林破壊は起こるはずがない。しかも、農業は地球の地表だけを利用する産業であるから、工業のように地下に潜り、地下資源(化石燃料など)を掘り出して自然を破壊したり、それを利用して環境を汚染したりするようなこともない。ということは、農業は本質的に自然親和型自然共生型の産業であるといってよからう。』

『森の豊かな東洋では、神と人間と自然が親和共生しようとする物神一元論に基づく自然親和型自然共生型の多神信仰(物神一元論型宗教)が生まれ、それがやがて自然親和型自然共生型の「森の東洋文明」へと発展していった。したがって、「森の東洋文明によるかぎり、環境問題は起こらない」ことになる。』

『森の少ない自然砂漠といわれる草原の西洋では、神と自然と人間が対決し、神が人間を支配し、人間が自然(物質資源)を支配するとの物神二元論に基づく自然対決型自然支配型の超越神信仰(物神二元論型宗教)が生まれ、それがやがて自然対決型自然支配型の「西洋の草原の文明」へと発展していった。したがって、「西洋の草原の文明によるかぎり、環境問題は起こるべくして起こる」ことになる。』

『森の有無が人類文明を自然親和型自然共生型(環境親和型)の「森の東洋文明」と自然対決型自然支配型(環境破壊型)の「草原の西洋文明」に分け、しかもそれら森の文明と草原の文明の違いがまた、それぞれの環境問題を異にしたということである。この証拠に、地球の現状は、環境破壊型の西洋の草原文明が世界を席卷しているため、大きな環境問題が世界各地で起こっている。』

おわりに

森林(自然)と文明(人間)との関係を概観する中で、文明が自然破壊的であることは一面では真実であることを認めた。一方、環境と比較

的安定的な関係を持って持続的な暮らしがある（あった）ことも事実である。鬼頭は文明の多様性を考察し、動的な文化論を構築するうえでの注意として次のように述べている（鬼頭、1996）。

『伝統社会のさまざまな社会的、文化的、宗教的な仕組み必ずしもすべて環境保全的とは言えなし、そもそも、そのような仕組みの発生に関しても環境保全的な目的で出てきたのかは明らかでない。しかし、少なくとも言えることは、近代文明の中で、必ずしも持続可能な形の環境との関係は得られなかったことは事実なのである。それとは対比的に、伝統社会のなかには、その出現の契機は不問にしても、結果的に環境保全的な効果を持った社会的、文化的、宗教的な仕組みがかなり偏在し、比較的安定的な関係の中で持続可能な関係を取り結んでいた社会が多く見られるという事実である。

そのような伝統社会において、人間と自然とのかかわりのあり方はいかなるものであったのか、そのあり方が、結果的であっても、環境保全的な機能とどう結びついていたのか、また、社会的、経済的、文化的、宗教的な関係性はどのようなものであるのか、について知らなくてはならない。』

この環境と比較的安定的な関係を持って持続的な暮らしとして縄文時代の生活がある。

『現代人はこれまで、縄文人といえば、石斧で狩猟し、十分な獣も手に入らず、木の実もまずく、しかも迷信深くて文化も発達しておらず、まるで原始人のように考えてきたが、最近の発掘調査によって、そのようなイメージは大きく変わりつつある。すなわち、彼らは現代人よりも新鮮な食料を、しかも旬で手に入れ、豊かな生活をしていたことがしだいに明らかにされてきている。』（岸根、1996）

さらに、

『縄文時代の人々の暮らしは森の時間に支配されていた。春には、山菜をとり、夏には魚介類をとり、それから秋には木の実をとり、冬には狩りをする。三内丸山遺跡ではイノシシや鹿の骨はほとんど出ていない。代わりにムササビとかウサギとか小動物の骨が出ている。ところ

が西日本の遺跡だと、イノシシや鹿の骨がたくさん出てくる。三内丸山遺跡の場合は、陸奥湾でとれる豊富な魚介類が、クリとともにたいへん重要な食糧であった。

縄文時代前期の福井県の鳥浜貝塚から出土した骨を分析してみると、縄文人たちは、イノシシや鹿を一年中めったやたらにとっていないことが明らかとなった。晩秋から冬にかけて、つまりいちばんおいしい時に集中的にとっている。それがどうしてわかるかというと、イノシシや鹿の歯には年輪がある。その年輪を調べると、このイノシシはいつの季節に捕獲されたかというのがわかる。そうするとほとんどのイノシシや鹿が晩秋から冬にとられている。そして小さな幼獣はいない。大きな成獣しかいない。幼獣はできるだけとらないようにして翌年のために残しておくという思想があった。

このように、縄文人たちは春夏秋冬という日本の季節の循環にぴったりと適応した生活を行っていた。そこには季節ごとに変化する森を核にした一種の循環のシステムが維持されていた。』（安田、1996）

のである。縄文時代の生活は、森林から生まれた共生と親和を目指す文明であり、自然－人間循環系の文明である。次回は、この文明を手がかりに、環境問題への対応について考察する。

参考文献

- オギュスタン・ペルク 1996 地球と存在の哲学—環境倫理を越えて ちくま新書
川崎寿彦 1987 森と人間—2000年 日本林業技術協会
岸根卓郎 1996 森と文明 森こそは人類の揺籃, 文明の母 サンマーク出版
鬼頭秀一 1996 自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク ちくま新書
鈴木秀夫 1978 森林の思考・砂漠の思考 日本放送出版協会
松井孝典 1990 地球=誕生と進化の謎 最新地球学入門 講談社現代新書
安田喜憲 1996 森のこころと文明 日本放送出版協会
湯浅赳男 1993 環境と文明—経済環境論への道 新評論
和辻哲郎 1935 風土—人間学的考察 岩波書店